

ワンポイント・ブックレビュー

かどくらたかし
門倉貴史著『ホワイトカラーは給料ドロボーか?』(光文社新書、2007年)

残念ながらタイトルほど刺激的な内容ではない。最近の新書特有のネーミングと理解した方がいい。しかしながらホワイトカラーの働き方に関心のある人にとっては丁寧な解説書といえる。それは何よりも発行が6月20日ということで、法案提出が見送りとなった「ホワイトカラー・エグゼンプション」をめぐる経緯と議論など、労働関連法案に関する最新の情勢を盛り込んで議論を展開しているためである。そのため今現在の労働を巡る議論と問題点を、最新の情報に基づいて理解することが可能となっている。これがこの本の最大の長所のひとつといえる。

取り上げたテーマは、ホワイトカラーにおける生産性の水準に始まり、ホワイトカラーの間で深刻なサービス残業の影響の問題、確立されない能力評価基準とホワイトカラー・エグゼンプション制度導入への障害の問題、海外ホワイトカラーとの競争にさらされる日本のホワイトカラーの将来など、多くの範囲に広がっている。章によっては展開と課題提起に不満を覚えるものもあったが、ホワイトカラーがいま直面する問題の概観を理解するためと考えれば納得できる。

本書に対する最大の不満は、様々な問題解決のために提示された著者の処方箋にある。例えばここ1~2年の間に非正社員を正社員にする動きが活発になり、こうした身分の見直しが企業の高いパフォーマンスに繋がると評価、このような戦略をとる企業が成長すると明示している。それならばこれらの企業は、景気回復前の不況下において何故こうした施策を実施しなかったのか。正社員化戦略、すなわち良質な人材の囲い込み戦略は、現在の景気状況、人手・人材不足状況だから有効なのであって、いかなる状況においても成立するものではないと思われる。

こうした議論の進め方は、特に非正社員のスキルアップのための方策において顕著である。非正社員が正社員になるためには、個々の労働者がスキルアップすることが不可欠だと提起しているが、これはすでに定説となっている取り組み課題といえる。問題はその先なのだ。現実に非正社員が働く職場と仕事内容を考慮すると、どのようにしてスキルアップを図ることができるのか、そして誰が、どの組織が責任(担当)を負うのか。長期雇用の正社員をイメージして作られてきた人材育成システムでは対応は困難になっているのである。

そして著者が提案する対策は、低所得者のための減税、自己啓発優遇税制の導入、そしてセーフティネットとしての最低賃金の引き上げなどである。スキルアップに直接繋がる対策は提示されていない。ましてやパート、契約社員、派遣労働者、請負労働者など、異なる雇用形態に応じた対策は皆無である。すでに「非正社員」としてひとくくりにはできる労働者イメージが霧散している現状を考慮すると、もう少し丁寧な対策の提示に期待したい。

なおタイトルの疑問文に対する著者の答えは、「日本のホワイトカラーの平均的な労働生産性はそれほど低くない」というものであった。これは各種統計を比較した結論ということである。しかしこれはあくまでホワイトカラーの平均像である。しばしば指摘される点は、こうした平均像よりも、ある種の仕事、職種、業務における生産性の低さの問題ではなかったのだろうか。統計からはホワイトカラーの生産性は決して低くありませんでした、と言われて釈然としないのは、こうした生産性の低い業務に対する具体的な解決策が見えてこないからである。ホワイトカラーの生産性論議は、本書をもってしてもまだまだ続きそうである。(N・H)